文樂座稽古場のぞき

林　秀雄

九月の晦冷たい秋雨の中を文樂座の稽古場へ走つた。時刻は五時半頃であつたらう。

恰度舞臺は「櫻鍔恨鮫鞘」の切、それも大分アトの方のお妻と娘おはんの二人だけになつたへあと打見やり女房が、の邊で氣の這入つた古靱の音聲がガランとして暗い客席を通して響いて來た。ずつと後ろの方の椅子に腰を下ろして右手の客席を眺めると、織大夫、國六、伊達大夫、南部大夫、人形の方の文作光之助等の顔が見える。其他皆でざつと廿人位。娘おはんが『わしも死にたい』と母に縋りつきお妻が手拭を咬えて悶え泣く、へ親なればこそ、子なればこそ、と古靱が突込んで語る。文五郎としてはハツキリしたキマリ方である。（註・六日目見物の時は此形ではなかつた。）彌兵衛が出て來ておはんを門口へ突出しお妻を連れて一間に這入る處で道具が斜めに引かれて下手半分が門口になる。すぐ傍に腰をかげてゐた光之助が慌てゝ席を立つて行く。八郎兵衛の左をつかふのだらう。本釣がいくつか這入つて八郎兵衛の二度目の出になる。へ人目を包む頬冠り、で出て來た姿は流石治兵衛とは違ひ前身武士であると言ふ處が何處に出てゐる。娘が門口に居るのを見付けてからは古靱の語り口と共に動きも情愛溢るゝばかり、彌兵衛とお妻が不義してゐる事を知つてからのへ立つたり居たり身をもがき、千々に碎くる父親に、の邊になり、お半が絡んで門口をぐる〳〵廻る間の清六の彈く合の手の音色が實に素晴しい。と、突然清六の大きな摩がして『榮三はん、此位でどうです？』と言ふのに對し、『結構だす』と榮三只一語。其まゝ御兩人は續行。こゝらにも名人藝がひそんでゐる樣に思はれた。

八郎兵衛が刀を拔いて躍り込み、母親、お妻を斬つて刀を眞直ぐに振上げる右腕に娘がブラ下る處で隣りの椅子の寫眞部のI君が、『こゝを撮つたら宜しいでせうね』と言ふ。お半がお妻から口移しの書置きを覺束ない口調で泣き乍ら言ふ邊りの古靱、迫眞性のある處を聽かせる。こゝぴ邊でお客は泣くのだらうとフトそんな事を考へた。へ四ツ橋さして目出度く緞帳が下りたが、直ぐ又上つて例の型の處の撮影が始まる。それが終つて幕間廿分程で「中將姫」が始まる。聽衆はと見ると國防服の座の人らしいのが三、四人、少々淋しい。道具の都合で雪責めの處ではお約束の雪持ちの松の木もなければ雪も降らせぬので中將姫も此處哀れ氣がない。舞臺稽古風景だ。岩根御前の責め場になつた時、人形の連中が殆んど皆クス〳〵笑ひ乍ら使つてゐる。此「中將姫」は自分の嬢ひなものだけに普通に見物してゐる時より一層長いと言ふ感じがした。榮三の豊成卿は大阪では初役との事だが別に目立つた仕事もない。併し他の人が使ふよりは何處か豊成らしい風彩は濃い。幕切は上手向きの眞横の形であつた。

「中將姫」が幕になつたのが七時半頃、急に疲勞と空腹を覺えたので阿古屋は割愛して歸つた。